エノク伝承　その２

　以下は、五世紀のバビロニアとイスラエルの伝承である⇒シュワルツ『ガブリエルの楽園』p59-60。

神は天地を創造したとき、天地を聖なる光（無限光＝アイン・ソフ・オウル）で満たした。アダムとイヴは禁じられていた果実を食べたために、楽園を追放された。その時、二人は聖なる光を失った。この光をなくしたために、二人にとって世界は真っ暗になった。聖なる光に比べたら、太陽の光ですら、ろうそくの光のごとくか細いものであったからである。神は聖なる光の一部をツォハルという名の宝石に封入していたので、神は天使ラジエルに命じて、アダムに届けさせた。アダムが寿命を終えるとき、この宝石を息子のセトに譲った。その後も、代々受け継がれて、やがてエノクのものになった。エノクがその宝石の中をのぞき込むと、そこには燃える火の文字が見えた。その文字を読むことで、エノクは天界のトーラーを知り、賢者になった。賢者エノクは、やがて迎えに来たメルカバの戦車に乗って天界に上り、メタトロンになった。

（「ミトラ教研究．メタトロンの徹底研究」）